経済発展の要因と文化　読売新聞夕刊-1991.06.25

文化

経済発展の要因と文化

「東アジア比較研究」を終えて

脱冷戦と脱社会主義という二つの重要な基軸を中心に動いている国際社会の歴史的変動は、今後、どのようなかたちで二十一世紀への世界を切りひらいてゆくのであろうか。いわゆるエスニシティーの問題にその多くが由来する地域紛争とともに、経済発展と文化というテーマが重要性を増すであろうことは疑いない。

五年要した領域研究

このような状況に直面するなかで、私たちは、「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」（略称「東アジア比較研究」）という共同研究に一段落を画することができた。今回の共同研究は、文部省科学研究費重点領域研究として三年間集中的に実施されたものであるが、その準備期間と取りまとめ期間を含めると五年間にわたるものであり、人文・社会科学分野の重点領域研究としては第一号のものであった。経済学、政治学、国際関係論、歴史学、文学、哲学など様々なディシプリン（専門領域）に依拠する研究者約七十人、「公募研究」部門約四十人の合計約百十人参加し、毎年一回の全体会議には、レオン・バンデルメールシュ（フランス）、ロナルド・ドーア（イギリス）、W・T・ドバリー（アメリカ）、金日坤（韓国）、王家驊（中国）の各氏ら、海外の第一線の研究者の参加も得た。重点領域研究ということのために、自然科学分野に比べて格段に研究費の少ない人文・社会科学分野としては、予算的にも恵まれていたので、この間の共同研究の成果は、今後も様々なかたちで公刊され、社会的にも還元されることであろう。

新概念が呼んだ議論

「東アジア比較研究」が実施された期間は、いわゆるアジアNIESの経済発展が国際的な注目を集め、従来の社会科学理論をもっぱらとしては、これら地域の現実をとらえきれないという認識が前提に存在したのであったが、そうしたなかで、いわゆる「儒教文化圏」というコンセプトが、今回の共同研究の一環に組み入れられていたことは、様々な論議を呼んだ。

実際、八〇年代初頭以来、非欧米地域では日本だけが近代化に成功した例外だという永年の常識を突き崩し、韓国、台湾、香港、シンガポールが著しい経済発展を示した。また中国も天安門事件に見られる試行錯誤を経ながらも改革・開放体制へと移行し、ASEAN諸国のなかでも、マレーシア、タイなど、経済が「儒教文化圏」の影響下に発展している地域の成長が著しいことは、これら地域の経済発展の背景としての文化の問題に改めて着目せざるを得ず、とくに欧米の研究者のあいだで、これら地域の共通項として「儒教文化圏」論が再び重ねて後、今回の「東アジア比較研究」にいたったのであるが、内外の一連の討論を通じて現時点で総括できる私自身の結論は、ほぼ次の三点に集約できる。

第一には、今日の東アジアの経済的・社会的発展とその活力の源泉の解明は、従来の社会科学や個別科学（たとえば経済学）のみによっては不可能であり、経済発展をもたらす歴史的土壌や文化的背景が学際的に解明されねばならない。この場合に、総合的な学際研究としての地域研究（Area Studies）は、一つの有力な場を提供するであろう。

第二に、「儒教文化圏」というコンセプトは十分に検討されねばならないが、儒教ないしは儒教文化が直接、経済的・社会的発展の動因になったというような短絡は決してできない。このことは、儒教文化の伝統をもつ地域でも、自由な市場経済が形成されていない社会主義体制の国々が今日、おしなべて経済的・社会的な停滞ないしは混乱に陥っている現状からも明らかである。

第三には、今回の「東アジア比較研究」にいたった学問的に受けとめることが重要である。

私の現時点での総括は以上のようなものであるが、経済発展と文化の問題は、きわめて刺激的なテーマである。論議の多いところであって、制度や組織を重視する「制度論的アプローチ」ないしは「制度論者」と、文化的背景を重視する「文化的アプローチ」ないしは「文化論者」とのあいだの論争は、わが国でも海外でも、きわめて対極的であった。それだけに、この両者を統一的に把握する全体的な立場こそが求められねばなるまい。この点は、今日の人文・社会科学にとっての大きな宿題として残されている。

文化論偏重には疑問

私は、ほぼ右のような結論を得たのであるが、「儒教文化圏」的な発想は今日、もっともトレンディーなテーマとしてアメリカ、フランス、オーストラリアそして中国を含むアジア各地でしきりに論議されており、このテーマに関する国際会議も数多い。

私自身、去る五月中旬に、ハーバード大学のトウ・ウェイミン（杜維明）教授が主宰した米国学士・科学アカデミー主催の「儒教後の時代」「儒教文化圏」論の再検討」と題する国際会議に出席した。

「儒教文化圏」論は短絡的

制度論との統一的把握を

中嶋 嶺雄（なかじま みねお）

こうした知的関心の広まりのなかで、私自身は、一九八四―八五年にかけてサントリー文化財団の助成による「儒教文化圏の社会的・経済的発展に関する比較研究」と題した研究会を次々に提起されたのであった。

こうして、各国各地域の経済発展の要因は様々であるが、ひとたび「離陸」（テイク・オフ）が開始された社会においては、儒教文化ないしは漢字文化の伝統を有することが近代化と経済的・社会的発展の促進要因になっているというメカニズムをとらえることは、教的次元」と題する国際会議に出席した。日本からは渡辺浩（東大）、濱下武志（同）の両教授も参加した。

「（野間さんは）人間を救う大きな目的のために嘘をつかねばならないといった使命感にとらわれていて、ちょっと間があけている戦略はかりたてて、それでずーと高貴な嘘をつき続けていた」という大庭氏の言葉は、もちろん故人への敬愛の念から発せられているのだが、野間文学を考えるうえで示唆に富んでいる。

旧制高校の交友描く

三浦朱門「芋泥棒」（群像）は、初老の作家である「私」と、旧制高校時代の友人との淡いつき合いを描く。十日ほどして、友人は

文芸'91

＜6月＞(下)

16歳の習作群を掲載

雑誌「文芸」が、今年一月に亡くなった野間宏氏の追悼特集号を編んでいる。追悼文、座談会、年譜などとともに、大阪・北野中学時代に校友会誌に発表した、作者十六歳の習作十九編を載せている。

これまで、作家野間宏の文学的な出発は、三高入学後とされてきた。しかし、紅野謙介氏は、それ以前に書かれたこの習作群には「死と孤独と宗教性」がうかがえ、「野間の発想の元基」がある。野間文学を読みかえるきっかけになるのではないか―と解説で指摘している。

野間氏はつねに現実に目をむけ、時代を意識して仕事をした。小説作品も、世の中を支配した政治や思想に深くかかわっている。そこには、六〇年代末の全共闘運動のインパクトが必要だ

野間宏 追悼特集

〝再読〟ですくいとる神髄

三浦朱門「芋泥棒」

小説作法に熟練の域示す

たとえば笙井潔氏は、暗黒井千次、鈴木貞美氏の対談のおもしろさも、中村氏

紀のニヒリズムから生じた」ふたつの過激主義（ファシズムとマルキシズム）から生きのびた転向者ととらえ、川村湊氏は、三十三年の歳月をかけた長編「青年の環」の完成の意味ですぐれて時代的な作家だった。それだけに、時代思潮の急激な変化のなかで、作品の位置づけも難しくなる。

追悼号での若い世代の批評家や作家による作品の〝再読〟は、その時代性・思想性を評価しなお、余分なものが洗い流された後にのこる野間文学の神髄をすくいとる試みのようにみえる。

中村真一郎、大庭みな子、三浦朱門（芋泥棒）

たとえば笙井潔氏は、「偉大」な面白い小品。

「私」はクラス会で会った友人に、会社の新人研修で講演をしてくれと頼まれる。クラス会で話題になった不倫の話で思いついたのか、恋愛・情事・結婚といったテーマがいいと友人はいう。彼は電鉄会社の重役だが、戦争中の高校の寮時代からきまじめな読書家

外国人労働者が題材

佐藤洋二郎「河口へ」（すばる）は、ビル建設ラッシュが続く、江戸川河口・浦安の飯場で働く十九歳の少年の目で、同

言葉は、もちろん故人への敬愛の念から発せられているのだが、野間文学を考えるうえで示唆に富んでいる。

三浦朱門「芋泥棒」（群像）は、初老の作家である「私」と、旧制高校時代の友人との淡いつき合いを描く。十日ほどして、友人は

心臓発作で急死し、「私」は葬式に行く。

抑制の効いた文章、最後のオチの軽いユーモア、作品全体のどことない品のよさ。小説作法の熟練を感じさせる気持ちのよい短編だった。

外国人労働者が題材

佐藤洋二郎「河口へ」（すばる）は、ビル建設ラッシュが続く、江戸川河口・浦安の飯場で働く十九歳の少年の目で、同

で、すきっ腹をかかえた友人たちが描かれる。ここには、パキスタンから出稼ぎにきた元先生のパキ、泣いてばかりいる黒人のクロ、クロの肉体に劣等感をもっている日本人のパンチ、えらの張った目にいやけた顔に白粉をぬりたくるオカマの慎次郎、といった奇妙な男たちが働いている。世界中から吹き寄せら

じ飯場の男たちが描かれる。ここには、パキスタンから出稼ぎにきた元先生のパキ、泣いてばかりいる黒人のクロ、クロの肉体に劣等感をもっている日本人のパンチ、えらの張った目にいやけた顔に白粉をぬりたくるオカマの慎次郎、といった奇妙な男たちが働いている。世界中から吹き寄せら

海外の文化

ソルジェニーツィンに名誉博士号

米・ダートマス大学が授与

去る六月九日、米国のダートマス大学の卒業式典に、ソルジェニーツィンは久びさに公の席にあらわれた。児童文学者センダックらとともに、名誉文学博士号を与えられたからである。

ソルジェニーツィンはかつてハーバード大学の卒業式典のゲスト・スピーカーとして招かれ、極めてきびしい西欧文明批判を行い、そのことが大きな反響をよ

ソルジ

人なことがあった。いや、それは皮肉

招き

の図

用し

謝の

れて

元

ロシ

季刊